

樓仙蘇定芳君 人間四十空齋志 利育詩名世上聞

笑金井飛卿 質軒 岸上操

旧雨同頑感更新 無端去作玉樓臺 冠年誰偏幽明路 本命剛逢乙巳春 磁魂洗胸偏借酒 淋

清下筆便驚人 一鴈如尋夢雲深 風物依稀轉轉神

秋頌は詞をよよくしたすぐれた詩人、神田氏の前掲書に多くのページをさいて同情にみちた紹介がなされる。右の二首は秋頌の遺稿に附録したもの。早死した詩人を李賀にたぐえて白玉楼中の人というのはもはやきまり文句。だから同じ附録の平詩でも

笑金井飛卿 早東 国府徳徳

莫逆莫交未皆遺 問奇懸搦手今非 出門一笑異材折 煖旧長吁知己稀 昌谷歌詩嘔字盡 太

湖燈雨隔天飛 不圖三載莊前路 空把白笭來打靠

執金井秋頌 暮堂 結城 琢

青山寂寞詠書樓 極厭蘭燈何處求 身臥蓬蒿餘傲概 心存社稷抱歌憂 奎星墜地跋空狂 玉

樹賦風事已休 莫笑鍾情天亦泣 黃梅兩冷於秋

のように、李賀を引き合いに出すにしても「李賀小伝」や「金銅仙人辞漢歌」を使うのであろう。これらの詩人は、李賀の氣は詠んでいるであらう。またこれらの作は李賀詩の影響下にあるものには違いない。しかしこの程度のもものは、名所に立ちよる旅行者のようなもので、そこに深い親縁を求めることはできないように感ぜられる。

二〇世紀の李賀 (四)

1975.7.4.

王礼錫

昭和十五年（一九四〇）七月二十三日、わたしは周樹風『詩人李賀』（国学小叢書・民国二十五年六月初版・上海・商務印書館）を買った。同じころ、たぶんそれより早く、王礼錫『李長吉評伝』を買って読んだはずである。周氏の本は手許にのこっているが、王氏のは早くうしなった。その後、本屋でも見かけ、古本屋の目録でも見たが、買う気にならなかった。「二〇世紀の李賀」を書くので、買う気にならう、もう手に入らぬ、やむなく、ある機関の蔵本を復写してもらった。数日前とどいた古書目録にのっている。復写の費用よりず、と安い値段で。やれやれと思っただが、註明して手に入るともかぎらぬのだから、これはこれでよしとするほかない。わたしの復写した本は民国二〇年（一九三二）十二月再版で、初版発行日付がない。思いついて揚家駱『民国以来出版新書總目提要』をみたが、この提要、定価はしるすが刊時を記載せぬ。著者自序日付は、一九三〇、六、二十。「物観文学史叢稿」と銘うち、上海の神州国光社出版である。「物観」とは、唯物史観のことである。

夫つて、もう一度買おうとしなかったのは、最初に読んだときあまり感服しなかったからだろ

う。この程度のものが唯物史観なら、唯物史観がんで大したものじゃなそうだ、といつた生意氣をいっていかしれぬ。いまでも唯物史観の二とはよく知らぬが、この程度などとはかくくれるものでなそうなことは感じてゐる。また王氏の本も、今よみなおすと、李編研究史のながては、画期的なもの一つで、以後に現われる研究のいくつかのタイプを先導する。

唯物史観の方法を用いて中国の文学史を整理する、これはいひとつの大胆な向うみずな試みだ。中国の出版界は、いまにいたるまで、まだ一冊のスタンダードな文学史を出していない。

このようなことばで、かれの序文ははじまる。物しらすのわたしには確かなことはいえぬが、近代の中国文学史は、日本人の書いた中国文学史の綱案、細訳からはじまり、かなり長くその状態から脱しなかつたような感じがする。一九三〇年にもなおその風があつたとすれば、かれの着眼は警敏だといつてよい。だがかれはたちまち墮害にぶつかるといふ。

その一は、中国にはまだよい文化史がなく、ことに経済方面に関するよく考察された材料がたいへん少い。

その二は、詳細な時代研究と代表的な作家研究がない。

これでは文学史は建設できぬ。そこで時代通論と代表作家の評伝を一冊ずつ出してゆき、その全体を『物観文学史叢稿』と名づける。

長吉の評伝を最初に書くのは、個人的興味と、長吉がこれまで無視されがちだったからだ、といふ。

王氏について、橋川時雄『中国文化界人物總鑑』は次のように記す。

- 王礼錫 一八九九—一九三九 江西南昌の人。南昌心遠大学卒業後日本に留學して早稲田を卒業。帰国後革命に投じ、民国十五年国民党農民部秘書、国共分裂後国民党左派として離脱し段錫朋等のA・B団に参加「青年呼声」「新時代」の雜誌を主宰して民主主義運動を続け、二十一年陳銘樞の傘下に入る。神州国光社の總編輯となる。中国社会民主党の有力幹部である。同年福建革命に参加活躍す。その著に「物觀中国文学史」「戦時日記」(神州国光社出版)、「李長吉評伝」一冊、「市声草」(詩集)一冊、すべて上海神州国光社から出版される。
- 古の「物觀文学史」というのは『物觀文学史叢稿』とは別のものだろうか。叢稿の方は李賀を出しただけで終わったらしく思われる。以下、かれのことばを、そのまま、あるいは要約してならべることにする。いまの文学史では常識となっていることでも当時としては新しい見解だ、たろうと思われるものは挙げる。一連番号はわたしが勝手につけた。(一)内数字はページを示す。
- 1 唐代の文学は南朝文学と北朝文学の調和する時代だ。南北朝時代には、北方は農業経済目録の社会で、外來の遊牧民族に征服され、ために、北朝の作品は、農業社会の色彩に濃厚な遊牧社会の気分を帯びている。せいたくは南朝の社会となると、貴族政治の下で商業資本が飛躍的に拡大した。で、南朝の作品は、貴族的高尚が都會的せいたくの外衣をまとっている。(2)
 - 2 隋の統一は、北方が南方の繁榮を羨慕した結果だ。ここで南北文学はけしく相接した。(6)
 - 3 初唐は南北文学合流の初期。南方詩体のこの期に完成したのが律詩である。北方の剛健な詩

体は、かえって、南方のひと陳子昂によつて提唱され一派の新興勢力を形成した。(今)

4 平和な時代がつづくと、官僚階級は特殊勢力を形成し、没落貴族や民間出身知識人は権力・地位を獲得しめくくなる。しかし民間の剰余経済が大量の知識分子を生産する。官僚階級の詩は体制的となり、体制から阻外された詩人には二つのタイプがあらわれた。一は浪漫派で、熱中するエネルギーのはげ場がなく女と酒に生命を浪費し、あるいは苦惱の深淵に沈んで個人主義的感傷をうたうもので、李白らがこれに属する。二は自然派で、澄白な性情から山水に心をよせ、現実社会における葛藤を大自然のうちに消滅させようとするもので、王维・孟浩然らがこれに属する。この時代に出現した偉大な天才が杜甫。かれの詩は上にのべた各スタイルを包含し、天竺の大乱に人民の疾苦を目的のあたりにて、写實的な詩体を形成した。だから詩は盛唐にいたつて各スタイルを具備し、杜甫は盛唐の縮写、總結といふことができる。(9)

5 さて、中唐の李長吉。この時代の詩体の変化の原因は三つ。一は、盛唐詩体爛熟の反動。二は、大乱後の人たちの辛辣強烈な刺戟を求め、気分が協和音に満足しなくなった。三は、宮廷音楽と民間音楽の混淆、したがつて中唐は、爛熟と協和に反対する二つの極端な詩体を生んだ。その一は韓愈の一派。かれは散文においても四六駢儷体を打破したが、詩にも散文の方法をもちこんだ。その二は、元稹・白居易一派。口語で詩をつくろうとした(以語為詩。この語を口語と訳するのは限定しすぎるうらみはあるが、いまはかりにこういつてみる)。この種の詩の形式を元和体とよぶ。(11)

6 二種の詩体の対立する中に独立軍があらわれた。当時、有力な派別を形成するにはいたらなかつたが、おどろくべき力量を示し、千軍万馬の中を、単騎、重圍を破つて敵陣に突入する勇士のごとぎものが、二十七歳の短命詩人李長吉だった。従来の詩論家はかれを韓愈の部下としてとらえてきて、「一派の指導的地位に立ちうる詩人であることを見ぬなかつた。」「公莫舞歌」の序に「翼、諸家を晒とす」という。何たる自負、これこそ開創の気概だ。かれの詩中にもこうした自負はたいへん多い。(14)

7 かれは、冷、艶、奇、険において一家をなす。奇険は盛唐詩の格律の協和に対する反動と、乱後の強烈な刺激にたいする社会の要求による。冷は、社会の衰微とかれの性情の消極により、性情の消極は、かれの身体の衰弱と不幸な事件による。艶は、青年の情調と稗府曲詞の需要による。(16)

以上が「一 従物観的立場追尋長吉詩的来路」。大筋において、わたしも同感である。つぎは「二 長吉生平的考証」。

8 李賀、字は長吉。貞元七年(七九一)にまれ、元和十二年(八二七)に死んだ。英國のジョン・キーツと同じく二十七歳の短命詩人である。

9 長吉の母親は詩的想像力に富んだ。「太平広記」の語る母の夢物語を詩的想像力によるものとしているのだ。(29)

10 長吉は早婚で、結婚は十八歳以前。(30)「後園墜井歌」は新婚時の作らしい。(32)

11 奉礼郎就任は二十二歳（元和七年）（33）

12 ひとほかれの年少白髪を事実らしかゆめとし、感傷のことはだとカンぐるけれども、かれのは白髪がまじっているので、今の人になつてよくあること、怪しむに足りぬ。

「三 長吉詩化的生活及癖性」

13 環境は詩人を育成する一個の重要な原因だ。（49）

その通りにちがいない。だが、

14 昌谷の環境が非常に羨し……かつたので、その作品が羨しい。（51）

といつて「昌谷詩」を引用されると、首をかしかけたくなる。昌谷で生れそだった知識人は他にかろくに昌谷をうたつたのは、たぶん李賀がはじめであろう。李賀が見出さなかつたら、たれもその羨に気づかなかつたのだ。左瀬漢窓へだ、たと思ふが、さきに見たとき何の感興もみこらなかつたが、頼山陽の文を読んでから耶馬溪の奇を識つた、と告白した。詩人の夢想が、この自然を見出し、育成したのだ、というべきだろう。その方が李賀の詩観にも合うのだ。だがこゝういふては唯物史観には都合よくないのかもしれぬ。

15 「昌谷詩」は字句の精練されたものがたいへん多く、「細香洒平水」「類縁赴墜地」「草髮垂根鬢ノ光露泣幽渌」「擗露鍍古榭」といふ警句は教えるにたえぬ。ただ章法は錯乱はなほだしく、たぶん零章断句をかきあつめて成つたのであろう。（56）

これも、すでに定説のようになってゐる。だが、章法錯乱とみるのは、この作の独吟断句であ

ることに気づかぬところから起った誤解だ、とわたしは思う。ただ、このことは、いま進めつつある「独吟断句 昌谷詩」がめでたく完結するまでは、断定するわけにはゆかぬ。

16 同じ昌谷をうたつても「南園」(第一卷十三首、扉外一首)のような短篇は、筆機觸発して一気に成った(ただし各首は隨時に生まれた)もので不朽の名作だ。(57)

17 古来、紅葉や蕉葉に詩を題することはあるが、竹竿上に詩を題することへ昌谷北園新笋)は千古ただ長吉一人のみ。(60)

18 十日間、詩を作らなかつた、ということをやわやわ「五粒小松歌」の存にかきつけていることから、かれがいかには詩に「つとめたか」がわかる。(62)

19、かれ詩が人から鬼語といわれるのは、かれが神経過敏で、思想上、感覚上で幾つも飛躍をかかっているのだから、人にはとらえにくいのだ。「銀河流雲学水言」は視覚から聴覚に転換して人に理解させなくしている。(63)

「銀河」の句ていどのものは、現代の詩になれた目からすれば、それほどふしぎがることはない(なおあるいは *resemblance* のだ)。けれども一九二〇年代に T. S. エリオットが宣伝するまで、ジョン・ダンの詩がわからぬといわれていたそうだから、そこらを水準に書くのが文学史の任務ならば、王氏のことばにあまりこだわることでもできぬ。

20 李賀の死後、その従兄が、賀の集を便所にほうりこんだ(幽閑鼓吹)とともに学んだ(二同志でありながら、従兄がそうまでしなればおられなかつた)ことで、賀の偽倣の程度が察せられ

る。(64)

どうもこの論理はおかしい。従兄のくだらなさか思いやられるとこそいふべきなのだ。實はこのころでは被害者なのだ。だが、この話から爾の倨傲を説くのも、一種の定説だ。すぐれた人間を、ある集団が、よってたかって「悪者」に仕立てあげてゆく経路がここによくあらわれており、王氏は唯物論者だろうのに、その唯物論が、被害者を救う方向に働いていない。

「四」長吉樂府的反駁偶傾向」

21 中唐の代に韓愈が出て文學革命の旗をかかげ、四六駢儷の文体をうちくたき、詩においてもきわめて目田を詩体でかき、詩を用いる以外、詩と散文の境界がほとんど粉砕した。(66)

22 長吉は、その詩体からみて、積極的に格律に反対した者だ。かれの詩中には当時も、とも盛行了した詩体——七言律詩は、一首も見出せぬ。ただ韓愈の詩のように詩的特性を失ってけおらぬ。だからかれは、反格律反駢儷のも——とも純然に成熟した詩体を創造した詩人なのだ。

この指摘は鋭い。当っているだろう。ただ韓愈の詩が詩的特性を失っている、というのは問題のあるところだ。二十世紀の詩を先取している点では韓愈もまたそうなのであって、かれの作にいちじるしい、いわゆる、散文的、なるものは、むしろ中國詩の領域拡大というべきものだろう。23 樂府の反駁偶傾向は、李白が先声で、韓愈はけきすぎ、李長吉はこの偉大な仕事を円満に完成した。(91)

この説は正確で、たぶん定論とすることができよう。

「五 長吉詩的感傷色彩」

24 「序中思」の音調はうらわかい憂なぐらい部屋の中でこのためとすすり泣いているようだ。

こわいものけ甚だ多く、数えあげることできない。(106)

25 かれは「死」字を囁とすることを好んだ。読むと音調の上で陰気な重圧が心にのしかかってくる。(107)

26 長吉の詩は重化粧をした美人みたいだが、豊饒な色彩のうちにも感傷的な調子が少くないだけではなく、かえって多愁多病のさまがにじみでる。……上にあげた例のうち、紅と緑にぎやかな色だが、かれの手に染められると、老紅・冷紅・墜紅・幽紅・愁紅・浣花紅・空緑・静緑・類縁のようになちまち悲惨なことばとなり、まして、白・素・雪のようなもともと枯淡な色け、ものすごい境地を写し出すものとなる。(111)

この分析は簡単だが、のちの、李賀における色彩の研究を先導する。ちかごろでは日本文学や欧米文学の研究界でも、色彩研究が流行しているようだから、王氏は、よく首つ掛の種をまいたものだ。もっとも、王氏も、あるいはこれを日本の、あるいは欧米の、何かの研究からヒントをえたのかもしれないが、そこらのことはわたしにはよくわからぬ。

27 長吉の詩を読むとまったく鬼気迫るのをおぼえる。古今の評詩者が異口同音に鬼才とか鬼とかよぶゆえんだ。この鬼気は、感傷の深刻な表現だ。(115)

28 哭・泣・愁・泣……寒・冷・暗……古・老……血・死・月……等の文字の愛用口かれの詩に感傷

的な韻子をおびさせる。(122)

29 「苦昼短」において、芸術的方法で「命短き」痛苦を表現するとともに当時の社会の道教的迷信を指摘している。

30 「公無出門」には、生きるに苦しく、ヤリとて死ぬることでもきめ痛みがうたわれ、人をして泣かせしめない。(139)

31 知己は得がたく、著作も無益(秋来)い、そ軍人になろうか(南園)などというが、ヤケっぱちの夢想にすぎぬ。自身の不遇に対する不満が、精力富貴への諷刺となり、下層人民への同情となる。舜風曲、老夫採玉歌、感賦。かれの描写の手段は非常に深刻だが、読者に同感させる深さにおいて、白居易には及ばぬ。蜀の詩が怪麗の外衣をまとうからである。

この「深さ」を「広さ」といいかえるなら、わたしは賛成する。いかなる詩集も新向ほどは売れないものである。

「六 長吉詩的怪麗の外衣」

32 長吉詩の怪麗の外衣も、偶然の産物ではない。中唐の文学革命は、南北詩体の合流中流である。盛唐詩に反対し、両極端におしむいた。白居易一派は浅易を力求し、韓愈一派は平易に反対した。韓派では孟郊の寒法、盧仝の怪怪。長吉はひとり怪麗を成就して一家を自立した。

33 かれの襲的表現には直接表示と間接表示があり、前者では紅(視覚)柔(觸覚)香(嗅覚)等。後者では、花、玉など。いずれも読後ただちに強烈なイメージを生ずる。

34 かれの「怪」的修辭法は、時としてほとんど人情物理を超越する。「拈加以理」のそしりをまねくゆえんだ。

35 倍加的描写 「三尺木皮斷文理」(北中寮)王琦注はこの三尺を「三寸とすべきだ」。「夷翁至今万万年」(相勸酒)王琦注「夷翁から唐の元和まで三千年にも満たぬ。万万年とけ重のすべ。たあやまりだ」。こんな議論は科学者が考証家にむければよい。詩人にいうことではない。

36 擬人的表現 「露在燈畔」(南園)「芙蓉泣露香蘭笑」(李憑箏篋引)等。

37 間接虚擬的形容 これは長吉にいちじるしい奇想で、世人が長吉は理において欠けるというのもまさにここにある。「銀浦流雲淨水声」(天上龍)「義和鼓日玻璃声」(秦王飲酒)

38 龜・風・鬼怪など想像上の存在を詩中に常用し、古血・古龜など、ふつうには運用し方いい字を運用し、読者に新奇の感をおこさせる。

39 盛時の人け、平淡無奇の美酒、甘香清醇の醕酒をのんだのち、この喉にヒリヒリするブランドーをのんだら、きくと狂わんばかりに興奮しただろ。

「七 長吉詩的影響」

晩唐詩人の馮道筠、李商隱、韓偓はみな李賀の影響下にあり、李商隱がもつともその精神を得ている。長吉は詩格の創造者、商隱は継承して成功した者だ。

「八 李長吉年譜」

貞元七年(七九一)長吉生。韓愈生大曆三年(七六八)時二十四歳。後爲長吉作詩弁。元稹生

建中元年（七八〇）時十二歲。後毀長吉。

十三年（七九七）七歲。新舊書皆稱是年賦高軒過。誤也。

十九年（八〇三）十三歲。是年杜牧生。長吉死後十五年。杜尚作歌詩序。

二十年（八〇四）十四歲。冊府元龜稱貞元末与李益齊名。

元和二年（八〇七）十七歲。長吉詩：「終軍未乘伍。顏子髮先老」終軍十八伍軍至長安。則長吉生曰髮当在十八以前。

三年（八〇八）十八歲。是年魯愈拜河南令。与盧雨還過李寓。李作高軒過詩。長吉亦進士舉入京。元稹等來憐倡嫌名之說以毀之。舉主韓愈為作諱弁。長吉卒不忘舉。

四年（八〇九）十九歲。居長安。五年（八一〇）二十歲。居長安。客遊篇有「三年去鄉園」之句。当是是年所作。開愁篇亦居長安時所作。

六年（八一〇）二十一歲。春歸昌谷。夏年作春歸昌谷詩。詩中「終軍未乘伍」是回朔語。出城弄璋琢云「草暖雲昏万里春」与春歸昌谷時令正合。当是同時所作。示弟及弟往廬山勸愛行篇皆

是年所作。

七年（八一〇）二十二歲。是歲自家詣京。始為奉禮郎。始為奉禮郎憶昌谷山居。送沈亞之各篇。皆是年所作。

八年（八一三）二十三歲。是年李商隱生。後商隱為長吉作傳。

八年（八一三）二十三歲。是年李商隱生。後商隱為長吉作傳。

十二年（ハ一七）二十七歳卒。

かんたんだが、李賀のために年譜を作ったのは、王氏がたぶんはじめであろう。以後多くの人が、これを訂正しつつ、詳細な年譜をつくる。

「校後記」

綠粉搖天光壁樓、石髮窮黃桑理施、獨坐展卷咽高秋、濕結嘆聲古竈愁！男子何必神血因？長虫
盡粉名節處、神力扛鼎稟詩雄、吹噓草石生華風、草石長生詩人死、恨血千年何處長？山寇擊書風
齒齒！ 十影塔讀長吉詩

長吉の詩打かつて、一時明わたしを夢中にさせた。

というような文章ではじまり、六ページにわたるこの後記は、しみじみとしたい文章だ。清末民初の多感な知識人のセンチメンタル・ジャーニーとしても貴重な一篇だろうと思う。

この本の本文の末に「一九三〇・六・二十・王礼錫自序於樹丸。」としるす。樹丸は日本の船名であろう。後記の末に「一九三〇・八・十五・礼錫」としるす。このときカドはどこにいたのだらうか。

近ごろ復刻の『讀書雜誌』の内容目録をみると、第一巻四・五期（民国二十一年五月四版）に

中国社会史論或序葉 王礼錫

第二卷二・三期（二十一年三月三版）に

論戰第二輯序葉 礼錫

第二卷七、八册（二十二年8月初版）に

中国社会形態發展史中之証的時代 王礼錫

第三卷三、四期（二十二年4月初版）に

古代的中国社会 王礼錫

がみえる。彼の雜誌のうち、中国社会史に關する論戰を四冊に特集したものらしく、「序纂」などという題で二回も書いてるところからみると、王氏はこの特集の企画者、少くともその重要な一人だ、たよりに感ぜられる。

民國二十一年は一九三二年で日本の昭和七年である。

『李長吉評伝』の後記を聞いたとし王氏は教文年三十二歳。その後、社会史論戰の場に出し、一九三九年四十一歳で死んでいる。

わたしが少年の日に王氏の『李長吉評伝』を重ねて讀んだのは、軽卒だった。いまのわたしからみて、この本に注文がないわけではない。しかしこの本には南拓の情熱と創意があふれている。それからほとんど半世紀過ぎて、わたしの李長吉研究が、のろのろと李長吉の周辺ばかり這いずりまわっているにすぎないことを感ずると、まったくけすかしい。

社会史論者としての、民主社会主義革命家としての、王礼錫氏についての研究はあるのだろうか。あるのなら教えていただきたい。まだないなら、どなたか、手をつけてくださると、うれしいのだが。

1973.7.15.